

都市の時代とまちづくり

現代は都市の時代である。農村でさえも都市化の現象が進んでいる。この時代に何が欠けているか。端的に言う「トータルなイメージがない」「全体を統合化するものがない」ということである。

まちづくりや地域づくりには、全体を眺めてみるという視点が欠かせない。よく中央集権と言われるが、今日の実態は中央の各省庁は分権で、集権のできるのはむしろ地方である。高知のことを中央が考えてくれるというのは大きな間違いで、高知のことは高知で考えなければならぬ。統合化できるのは「地域」で、地域が主体性をもって取り組まなければならない。

かつての日本は、それぞれの地域がその地域特有の表情を持っていた。しかしいま、日本全国が東京の亜流になっている。ただつくればよいということで、駅前も文化施設も同じ様なものができ、どこもかしこも画一化し、本来の意味で面白いところが少なくなっている。いまだ切なのは、東京に無いもので高知にあるものに目を向けること。自然でも歴史でも物語でもよい。他にないものを見つけ、それを生かすことである。

これからの時代は、都市と都市の競争関係がますます増幅される。同じものを比べるというのではなく、個性の競争である。

都市の個性は、
風土×歴史×人の営み

で表される。

個性はあると思えばあるし、無いと思えば無いという性質のもので、それをどう目覚めさせ、発見し、生かすかが鍵となる。

高知の人は気が付いていないかも知れないが、太平洋

ア教会を手がけたガウディは、自分が仕上げるなどとは思ってなく、後の建築家が手を加えてさらに良いものにしてくれればよいという考え方で、いまなおつくる仕事が続けられている。またよく知られるサン・マルコ広場は後に続く人々が常に「周りとの調和」を考え、時間をかけて作り上げた人と時間の集積の傑作である。ふつう、自治体や行政の仕事は単年度主義で一つの事業を行えば終わりということになる。しかし、まちづくりは違う。「本当に高知に必要なことは何年かかってもやる」という熱気が無ければ高知のまちは良くならない。時間をかけて、まちの質をよくしていくことである。

まちづくりに求められるもの

都市を美しくしようと思っても本当にやる気がなければできない。日本の建築家には「まちを見てくれ」でなく「おれの作品を見てくれ」というのが多い。それぞれ勝手に自分の主張をするようではいいまちはできない。

行政の各部署は、全体よりも、まず自分の仕事がかまなくいくことが最大の関心事で、せっかくなかった計画を止める者は悪者とされる。しかし強く反対を述べると、要するにやる気があるからである。

「みなとみらい21」の名で呼ばれる事業をはじめ、横浜の六つの戦略的プロジェクトは今のことごとく実を結んでいるが、当時は横浜市の方では無理といわれ、障壁だらけであった。

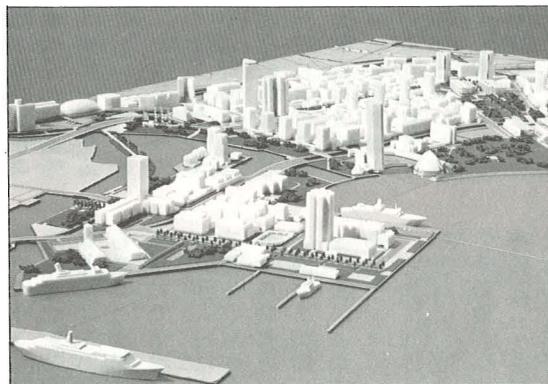
現実を変えるという行動は、必ず多くの反撃に会い、様々な困難に遭遇する。そこで必要なのは現実を動かし、現場をよく「調査」し、傾向や問題点を「分析」し、

他の実態や問題の所在や本質を「研究」する。その上で、現場にあった「構想」や「戦略計画」「政策」を立ててゆく。

連載 ■ 〈街づくり〉の現在 最終回

まちづくりの思想

田村 明
〔法政大学教授〕



「みなとみらい21」地域の完成予想模型

がこれだけ眼前にあるというのは、高知にとって大変な個性で、それに続く浦戸湾は高知の宝と言ってよい。古くは「河内」といわれた天与の鏡川・浦戸湾・太平洋をどう生かすかは、高知浮上の大きな鍵である。

まちづくりは文化づくり

はやりすたりのあるものは長続きしない。時代が変わっても変わらないもの、生活のにじみ出た文化を感じさせる個性的なまちが、これからは魅力を持つてくる。工業中心の時代では同じものをつくり、いいところと悪いところの差がはつきりした。しかし、いまや単なるものづくりの時代ではない。デザインや、人の知恵、はつきりと目には見えない価値（ソフト）の加わったもので勝負する時代である。

住民がいい状態で暮らして、いいソフトを生み出すまち、芸術家や彫刻家・職人などのクリエイティブな活動が活発で人々が生き生きと住めるまち、そうした文化の香り高いまちが産業都市となってくる。

文化は一朝一夕にはできない。これからのまちづくりは「文化づくり」そのものといつてよい。ものをつくるのにも文化的なつくり方が求められる。地域の文化をどう守りどうつくりか、「文化のまち」「文化都市づくり」こそ今日のまちづくりの課題である。

私が横浜市で仕事をした昭和四十二年当時、緑とか都市景観をよくするとかは贅沢なことといわれ、ほとんどまだ認められていなかった。しかしいま、都市の美しさ・アメニティ・個性・みどりなどは、当時反対していた中央省庁が進んで強く主張するようになっていく。

ヨーロッパの都市では数百年かけてつくりあげているまちがいくつもある。バルセロナのサグラダ・ファミリ

構想や政策を具体化するために必要な「事業」を企画し、これを「実行」する。そのための「ルールづくり」や「シクミづくり」も必要となってくる。

すぐれたまちづくりには、意志と知恵と行動の三つが必要である。

意志は、まちを何とかしなくてはならないと思うところから始まる。意志はまちづくりの発想となり、まちづくりの意義に目覚めさせ、そしてまちづくりの思想を生み出す。

まちづくりを具体化するためには知恵がいる。当事者だけで十分な知恵がなければ、広く多くの人の知恵を活用すればよい。また、知恵のある人々を発掘し育ててゆくことも重要である。

最後は、積極的で英知のある行動である。行動なくしてまちづくりはできない。そこで大切なのは一人を始めてもよいが、たった一人ではできないということ。まちづくりには、真剣に取り組む人間が五人要るといわれる。それも違ったタイプの人々がよい。異質の人々を取り込み輪を広げながら協働することによって、個性的で魅力あるまちがつけられる。

「まちづくり」という言葉は非常に柔らかない。「都市計画」「地域開発」といった言葉と違って、「まち」を市民のものにした。まちはみんなで作るもの、まわりのことを考えて協働してつくるものである。それだけに自治体の果たす役割は大きい。単発の一貫性のないタテ割り事業では、まちづくりはできない。各部署がタテ割り、独善的に行動してきたらば行政を、「まちづくり」という一つの求心的なものにしてゆく総合化が必要である。

自治体は、いわば市民の事務局である。いま、自治体に求められるのは、実務的な総合行政ができるシステムをつくりあげることである。

アーバンデザインの仕事

横浜のまちづくりでは「アーバンデザインチーム」が大きな役割を果たした。『都市ヨコハマをつくる』中公新書より

